

緩和ケアを受けるには「覚悟」が必要なのか？の巻

当院の緩和ケア病棟が新しくなったので、ちょっと基本的なことからおさらいしていきます。比較的最近のできごとです。ある患者さんが緩和ケア病棟へ入院する前に、その息子さんと話をしていました。その方がふと、「親父が緩和ケアを受けるということは、覚悟していたんですけどね・・・」とおっしゃったんです。それを聞いて私は、「やはり緩和ケア病棟に入院するのって、覚悟が要ることなのだな・・・」と、感じました。そしてその方の言葉が、どのような理解に裏付けられているのか想像してみました。

恐らくその方の中では、「緩和ケアを受けるといこと、イコール、緩和ケア病棟で亡くなること」という理解ですね。即ち、もう手の施しようがないから、売られていく子牛のように引き渡されるのだという感覚。治療と緩和は対極にあるという観念。確かに、抗がん剤などの治療が継続できなくなったタイミングと同時に、「あとは」という枕詞(まくらことば)とともに「もう緩和ケアだけです」などと説明をする医者も未だに多いのですから、患者さんの側に責任はありません。もし、治る(=完治する)ための治療でなければ治療ではない、というのであれば、転移・再発がんに対する治療のほとんどが「治療」ではなくなってしまいます。なぜならその目的が最初から「治癒」ではなく延命とQOLの向上であるから。なのでそれも誤解と言えば誤解ですが、治りたい患者さんの側には責任がありません。

脱線したので話を戻します。緩和ケアの世話になるということが、もうじき亡くなるということだとすれば、

⇒そんな状態だと認めるのは悲しい。

⇒だから緩和ケア=緩和ケア病棟は、近づきたくない縁起の悪いものだ。

「もうなにもしない」で、「死を待つためだけ」に入るところに決まっているのだから本当は行きたくない・・・。当然そうなりますよね。「そうでもないよ」、と言っても通じません。普段も、よく患者さんやご家族からは冗談交じりで「緩和ケア病棟なんかに入院したら死んじゃうでしょ？」なんて言われたりします。もちろん「入院したせいで死ぬのかい」と笑って返しますけど。

じつは私もそれほど能天気ではありませんから、一般の方の多くが(いや、医療者もわりと)そのようなイメージを持っていることくらいは知っています。事実、緩和ケア病棟は最後の場面で利用するところ、というイメージは必ずしも間違いではなくて、当院の場合は緩和ケア病棟に入院する患者さんのほとんどがそこで亡くなっていますし、そういう需要に支えられてもいるのです。

そのような、「緩和ケア=緩和ケア病棟に入ること、であって、その時までは無縁のもの」

という閉じた理解。その一方で、緩和ケアのもう一つの側面である、「がんと診断された時からの緩和ケア」という考え方があります。私はそれを個人的に、「困っている人たちを正
当に評価して、みんなで助けてあげること」と意識して理解しています。これについては
WHO、そして国による長年の、繰り返しのキャンペーンにもかかわらず、現場ではなかなか
浸透して行かない様子を、私はこれまでモヤモヤした気持ちで見えておりました。かつては
「何なら自分が世直ししてやろうか」くらいに思ったこともありました。でも私は、その「世直
し願望」をやめてみることにしました。人が何をどう思うかはその人の勝手です。それぞれ
に事情や成り行きがあり、タイミングがあるはずで、知るためのチャンスを作ることは大
切ですが、外から力を加えても決して人の心を変えることはできません。人を変えるのは、
その人の中で起こる気付きだけです。

同業者の中にはこうした私の態度を努力の放棄として捉える向きもあるでしょう。構いま
せん。人は自分から変わりたいと思った時に初めて、変われるものなのです。そして、どう
変わりたいかも自由。「今までいろんなことを我慢してきたけれど、覚悟して、甘んじて緩
和ケアを受けることにする。」それでもいいじゃないですか。立派な決心だと思います。その
覚悟、お引き受けしましょう。いずれにしろ緩和ケアは、患者さんの残り時間の多い少ない
にかかわらず、「困っている人たちを正當に評価して、みんなで助けてあげる試み」のすべ
てです。そしてそれはいつでも、どこでも、だれにでもできることだと、私は思っています。

どこの場所・病棟でも、専門家もそうでない人も、それぞれの役割を感じて果たそうとす
ることがだいじだと思います。言い方を変えると、緩和ケアとは、みんなが誰かの良き隣人
になること、というのが私の理解です。その中で緩和ケア病棟という場所も、患者さんの経
過の途中や終着点で関わる、ひとつの場所に過ぎません。次回は緩和ケア病棟の役割につ
いてお話しします。